

一木^{ナゲ}抛ウチガタク独り山ニ在リ

「いちい木芸館」主宰 土田耕作

七月 日トシテ^{エンカン}炎艱タラザルナシ
一木^{ナゲ}抛ウチガタク独り山ニ在リ
午熱ノ工房^{バクチャ}麥茶モ好シ
老来^{シキ}頻リニ憶^{オモ}ウ花^カ顔^{ガン}（10人の孫の顔）ニ遇^アハ
ンコトラ

※ この七月の燃えるような暑さは1日として人を苦しめないではない。
生まれ育った故郷の木、一位への思いは絶ちがたく、自分は1人になってもこの山のはざまに生き続けよう。
真昼の熱気に満ちた工房で麦茶を飲むときの何という心地よさ。
それにしても年を重ねるにつれ、仕事しきりに目に浮かぶのは、
その一つひとつにあうこともままならない10人の孫達の顔、顔、顔である。

はや六月、梅雨期のない北海道、との定説は疑はしく、本州に似たようなじめじめしたカラリとしない気象は、いつもの年のことで、不安定この上ない。この六月に催されるのが通例の小学校の運動会です。

どんより曇った灰色の憂鬱な空だが、暗迷を吹き飛ばせとばかり湧きあがる練習の歓声が風に乗って切れぎれに流れてきます。

全校生徒の数は10人で、この春、4人の卒業生を送り出して、一挙に6人と激減状態に直面して、部落会議にも等しい集会で、唯一、廃校を免れる方法は山村留学生を受け入れるのみ、未来図が描かれて、雲をつかむようなこの話が、「案ずるよりも生むが易し」を地で行くような展開をみせ、一挙に本州から3人の留学生を迎えたのです。横浜から母子の1組がこの地に永住の決意のもと、敢然と転居してきました。千葉県からは2人が里親2戸にそれぞれ単身で移ってきました。更に、津別本町から町の職員が転居の形で兄弟2人が揃って入学して援軍となり、相生小学校は、ギリ貧から脱して、ドカ貧に陥ることを免れたのです。

遡れば、この小学校にも最大児童数300人を数えた歴史があるのです。その背景にあったのは、道内屈指の林業資源にあったのです。よだれの出るような針・広葉の優良樹が、市街地の中心を占める原木集積場一工場に雲集し、適材適地の法則に従って全道、全国に送り出されたのでした。何十輦の丸太を積載した貨車がレールをきしませて轟々と相生駅を発進して行く殷賑を極めた最盛期の栄光は、すべて一場の夢、はかな過ぎる幻となって、うたた懐旧の情に耐えないものがあります。旧国鉄相生線は、この林業の衰退と軌を一にするように10年前、廃線の至上命令に屈したのでした。経営の才に乏しい私の経営する製材工場も、早々と戦列から敗退してしまいました。残ったのは一位の工芸加工を志す工房だけでした。かつては十数人が働いていたこの工房への25年前の注文書が出てきましたが、1品種200個という数字が並び、信じがたいブームであったことを物語っています。今は、津別市街地からバスで通勤する従業員が唯一人。「家内を女工にしまった」と亡父は私を嘆いたが、その家内も60の半ばに達して終日の労働に耐きれなくなりました。

戦中の勤労動員体験と、在学時の旧網走中学校の校



訓であった「質実剛健」, 「勤労愛好」に培われた労働への意欲は失わせない私も、まもなく古希、寄る年波には抗すべくもなく、その時期が迫ったとき、どう処するか的心構えも甚だ心もとありません。

第一に、一人息子は近くの小都市に居を構え、3人の子の父となって、あとを継ぐ気配も見せません。もともと見切りをつけてはいたのですが…………

第二に、いつも自嘲していることですが、趣味か道楽にも似たこのなりわいは、よほどの狂的な執着心がないと飛び込めない世界です。利口な人は近かつかず、やらないのです。

五月に、北見市恒例の「木のフェスティバル」が3日間賑やかに開催され、クラフトと一般には称される私達部門は、出品者の数も減った上、来場客も特別の関心を払わない人が目立ち、当初の積極的な売り手、買い手のやりとりも影をひそめて、愛別離苦とも云うべき断絶感をもたらしたに過ぎません。木の仕事を続けるよう励まされ、力づけられ教えられることが多かった3人の大先達、ひょんなことから巡り遇った益子焼の浜田庄司、鳥根県八雲岩坂の和紙、安部栄一郎、104才の長寿を全うされた彫刻の北村西望、の諸先生。共通するのは仕事に傾倒、没入する愛情の深さ、なかんづく虚勢や高ぶりの微塵もない姿勢でした。角盆、色紙、條幅の、今は遺品となった作品を毎日見つめて、そして物は手だけで作れるものではないとの思いが痛切です。

私は、30年来の糖尿病患者で、労働は保健のためにも絶対に必要だったし、中断するつもりはありませんが、この頃、急に盛んになってきたもの作りへの意欲が、10年前のことだったならばと、うたた悔恨に耐えないのです。20余年前、ある禅僧の導きで漢詩作に親しみを持つようになって、詩が成れば一位の木塊や板に墨

書して心境を托すよすがとするなど、木の労働と共に、欠かせない处世の一環となっているが、根底に「老い」と名のつく一切のものへの拒絶があり、10人の孫達にも「ヂイチャン」などと呼ばせず、私を「ジエイド」妻を「バブ」と呼ばせております(ロシア語で祖父、祖母の意)。老いの自覚をもたぬ小宇宙にさまよい漂う行く末を見極めてやろうと、幼い留学生のような殊勝で華やくだいわば魂の躍動ともいえます。この頃、周辺の国道筋に目立つ農・酪農にも及ぶ経営規模の拡大の風景は、実にさまざまの流通経済国際化の断面をみせつけ、巨大・大型の方向が活路のすべてのように映ります。一方、消費税5%への増税決定、「住専」の理不尽な国民負担、不景気の慢性日常化、等は、さまざまな日々の営みの将来を危うくし、脅かし、苦難の道に追い込もうとしています。みかけの大小や、窮屈な規格に染まらない歩みの持続にひたすら保つことが分相応というものでしょう。

山村留学生達は、そこに自然があるから、と異口同音に動機を語るが、残された自然は蓄積の裏付けを失った継ぎ接ぎの貧困の自然であって、威張れたものではありません。相生小学校がすべて留学生で埋められる時代が来るかも知れず、しかし、自然を求めて止まぬこれら新しい「よそ者」が群れとなる過程で、その群れとつながる人々の出現によっても、この地に新しい何ものかがもたらされるでしょう。自然と人間とは、同一の法則の下にある、と説く老子のような人もいます。人間もまた自然現象の一部に過ぎません。

ハグ セイロ タタミ
逸レシ青鷺八竹ミテ 帰心切ニ
ショウトウ ショウキンテン
緑葉ノ梢頭ハ 小禽囀ズ
ソボク キザ サクセツ
素木ヲ刻ンデ 身ハ削屑ニマミレ
セイ チイン
清風一颯 知音マレナリ



- ※ 仲間とはぐれ、行方を誤った青鷺が一羽、村はずれの池のほとりで、ねぐらへの思いも切実にただづみつくす姿は、瞑想する哲学者のようだ。みどりを増した木々のこずえに、小鳥たちが飛び交い、囀っている。
- 自分は、工房で原木をさぎみつ、去来するあれこれの中で、体は、木屑いっぱいにもみれている。ときにさわやかな風を感じて、自分の心を知るほどの友の訪れはないかとわれに戻る。

◆おわりに

一位は文字どおり、木の中の1番。その気品と香気にとりつかれ、もの作りの会社を興して30年。ことし3月会社は解散、個人経営となりましたが、仕事の中身は少しも変わらず、一位のほかに、キハダ、シラカバ、エンジュ、等も原材料として、これまでの作品は、百種をこえています。毎日2人、時には妻の手を借りて作り続けております。

作品は主に日常使用する雑器で、茶筒、茶壺、鉢類、筆筒、お盆、皿、ヘラ類等。また、この頃は、健康器具も多種多彩となり、ボケ退治、こり取り、ツボ刺激棒、一位のダンベル（重量別）等、道内、本州のデパートにも出店、待っていてくれる人達も多くなりました。

恐ろしいのは“ボケ”ですから、なるべく頭を新鮮にする努力をしております。漢詩作りもその一つで、英語、ロシア語の教室を開いたり、3年前の釧路ラムサール会議には、ボランティア通訳に1週間通いました。来年までには約1万5千点の蔵書を開放しようと私設図書館の完成をめざしております。

体力は多少落ちたものの、一病息災といますから、20世紀に入っても現役でいられる自信はあります。これからは、自分独自の「芸術的」作品を生み、創って行きたいと思っております。

この度、「頑張ってますシリーズ」に拾い上げていただき、関係者皆様のご好意に深く感謝しております。

著者紹介

1928年 網走郡津別町で生れる。津別町相生在住。

1966年 (株)土田阿寒銘材設立。

1996年 「いちい木芸館」となる。
主にイチイを原材料として各種クラフト創作

北海道新聞、網走新聞、美幌新聞、等に数多くの随筆、漢詩を寄稿

『頑張ってますシリーズ』 原稿募集

ウッディエイジでは、『頑張ってますシリーズ』を掲載しております。『頑張ってますシリーズ』は、会員の方々のページです。「会社・工場自己紹介」、「製品の紹介」、「木材業界に対する提言」など、何でも結構です。お気軽に応募してください。いつでも受け付けています。応募要領の詳細については、当協会にお問い合わせください。